The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂先賢の業績と遺品の蒐集・整理・保存に關する近況について
Author(s)	木村, 英一
Citation	懐徳. 1980, 50, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90586
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德堂先賢の業績と遺品との蒐集・整理・保存に關する近況について

木村英一

明治も大正も日に月に遠くなってゆく。我々の社會は、斷え間なく發生する幾多の問題を抱えながら、二十一世紀に向って驀進しているが、元來、人間の生活における時間と空間との連關が、歴史的・社會的な自覺的展開に外ならぬ以上は、過去を過去として正しく尊重することを通じてのみ、それと相對的・相關的に、未來の向上的な展望が開けて來る。

懷德堂記念會の事業に協贊して堂友會を結成している我々にとって、江戸時代後半期に二百四十年の歴史をもつ舊懷德堂、大正初年より昭和の終戰に至るまでの、懷德堂記念會によって設立運營された重建懷德堂、終戰以後、事業方式を新たにして今日に存續している懷德堂記念會、等の全部を通じて、時と共に散亡・堙滅しようとする堂の業績や資料を、蒐集し、整理し、保存するための適切な措置を講じることは、當然、我々の大きな關心事である。そこで私は、最近二年間の蒐集・整理・保存措置の進展を、この紙面を借りて簡單に報告し、兼ねて御協力を賜わった方々の御盛意に對して、厚く御禮申し上げ度いと思う。もっともこの記事は、次の數件を報告する爲めに、取り敢えず書き留めたもので、それぞれの詳しい内容や紹介については、他日整理が進行するにつれて、それぞれに發表されるこ

とになるであろう。

一　新田文庫

江戸時代の懷德堂が、維新の影響を受けて閉鎖されたのは明治二年（一八六九）であったが、當時堂の責任者として最後の教授であったのは並川寒泉先生（七十四才）、預人であったのは中井桐園先生（四十七才）である。寒泉先生は明治十一年（八十三才）に、桐園先生は明治十四年（五十九才）に相踵いで歿し、ここに舊懷德堂の學は一應絶學に歸した。しかし桐園先生の嗣子中井木菟麿（字は天生、號は黄裳、安政二年生、昭和十八年八十九才にて歿）、その異母妹中井終子（明治十年生、昭和三十年七十九才にて歿）の二先生は、幼時の庭訓に基いてよく和漢の教養を身につけ、後、或いは日本ハリスト正教會のニコライ主教と相識ってその聖書翻譯事業を助け、或いは兄妹揃って梅花學園に教鞭を執る等、終身聖職を守って娶らず嫁せず、清く正しい生涯を送られた。晩年、終子先生は木菟麿先生の養女となられたが、現在池田に在住される新田和子夫人は、終子先生の養女として晩年の兩先生に事え、中井家傳來の遺品や兩先生の手澤の書籍・兩先生自筆の著書・記錄・日記等をよく保存して今日に傳えられた。この記念すべき遺物を如何に整理し保存するかについては、夙に少數の識者の思いをめぐらしていた所であったが、新田夫人の終始變らぬ誠意と、關係各位の善處とによって、終にその方途を實現すべき機會が到來した。卽ち昨昭和五十四年春、夫人は兩先生を偲ぶ若干の遺品以外の全部を擧げて、阪大圖書館の懷德堂コーナーに寄贈された。これがいわゆる新田文庫である。遺品の內容は多種多樣であって、その紹介には今後の綿密な整理を待たなければならぬが、受入れの便宜上假りに羅列した項目の手びかえによれば、無慮三百五十項目に及んでいる。

二　北山文庫

中井木菟麿・終子二先生は、江戸時代の舊懐徳堂の教養を身を以って傳えた最後のお方であって、その清高篤實の風格は仰ぐに堪えたものがあるが、其の後大正に始まり昭和の終戰と共に終った新學塾重建懐徳堂において、松山・財津二教授の跡を承け、最後の教授としてよく重任を全うせられたのが、北山吉田鋭雄先生である。吉田先生は、大正五年に重建懐徳堂が竣工し、松山直藏教授を中心に講義が開始されて間もない頃、即ち大正九年から教師の任に就かれた。十二年に講師として中國に留學、十四年の歸朝と共に助教授に進まれた。昭和二年、松山教授・稲束講師の相踵ぐ病歿の後、吉田先生は、昭和四年に教授となられた財津愛象先生と共に、堂の講義擔當者の中心となって活躍され、著實な成果を擧げられた。しかしその後數年にして日華事變が發生し、更に十六年に太平洋戰爭が勃發するに及んで、文化事業の遂行は日ましに困難を加えて行った。そして終に二十年三月の大空襲による堂の燒亡、つづいて終戰および戰後の混亂、という異常事態に直面したのであった。この情況の中に在って、二十三年四月、吉田先生は教授に任ぜられ、堂の復興の中心人物として重責を荷われたのであるが、誰か知らん、翌五月には先生の急逝があって、この期待は惜しくも崩壞した。しかし今にして顧みれば、これが歴史的轉換の一面を象徴する姿であって、先生の存在は、重建懐徳堂に有終の美を濟したものであり、その誠實な人物・學問は、懐徳堂の傳統に、更に一つの光を添えたものとして敬仰される。

先生の歿後、令嗣晋氏の御決斷によって、先生遺愛の藏書の大部分を、北山文庫として阪大の懐徳堂文庫に寄附され、先學西村天囚先生の碩園文庫以來、壞徳堂關係者の遺書・遺物の蒐集保存の例に倣われた。その後、昨五十四年から今春にかけて、晋氏は、しばらく御手許に留めて愼重に檢討されていた殘部を擧げて、北山文庫に追加分として寄贈された。かくて懐徳堂關係者の遺書・遺物の蒐集・整理・保存は、晋氏の御協力を得て更に一歩を進めることが

出來た。因にこの追加分は、受入れの際に作られた假目錄によれば、約四百點に上っている。

三　松山直藏先生の講演筆記

大正の重建懷德堂において、禮聘せられて最初の教授の任に就き、講座を主られたのは松山直藏先生である。先生は大正五年に就任以來、昭和二年に惜しくも病歿されるまで、僅か數年の短期間であったが、その敦厚、著實な人物・學問は、能く大阪漢學の中心となって、世道人心に大きな影響を與えられた。今年は先生歿後五十三年に當り、辱知と私淑とを問わず、後生にとっては、追慕の情の益々新たなるものがある。ところで恰も先日、私は、先生が嘗て大正十四年十一月十三日に、大阪工廠において講演された「儒教教義一斑」の速記錄のプリントが、先生の女婿中川幸三氏の筐底に祕藏されているのを、寓目する機會に惠まれた。ここに中川氏の御許しを得て再錄し、先生を偲ぶ資料の一端に供したい。

儒教教義一斑（大正十四年十一月十三日於大阪工廠）

懷德堂教授　文學士　松　山　直　藏氏　講演
陸軍砲兵上等工長　岡　田　治　作
事務員　佐々木種造　筆記

三輪工廠長挨拶

本日は當市懷德堂教授であらせられる松山先生に御願して儒教教義に關する一場の御講演を御願した次第であります。この懷德堂は約二百年前から當大阪に漢學儒教の講義及教化を遣られて風教道德の上に益されたこと莫大なるものがあったのであります。又當會に對しましては過般畏くも御下賜金の御沙汰がありました。漢學の振興

に付ましては九重の内に於かせられても御軫念のあることと恐察し奉る次第であります。この漢學が德川時代に於きまして道義の根本を成して居たことは爭はれない事實であります。又現に先月（十月）上旬大木伯爵閣下が大阪へ來られたとき次の樣な意見を述べられました。それは「人間の道義を履み行ひ居る者は漢學の素養ある者である。斯く風敎に益する漢學の振興に就ては過去三回の議會で奬勵案が全會一致を以て可決せられた所以である。卽ち漢學の尊重は政黨政派を超越したものである」と。之に對して前の池上大阪市長の御答は「今日漢籍を讀むことは人格者である。人道道德の履行者であると世の中の人が解釋する」と云はれました樣な次第であります。私は漢學のみが日本の道義を維持するものとは思ひません。國學も世道人心を維持する要素なりと考ふるのであります。

懷德堂は獨り漢學のみならず國學をも講義せられて居るのであります。松山先生は明治三十年帝大の漢文科を卒業せられて以來孜々此の方面に御研鑽になつて居つて極めて御造詣深い方であります。吾々が同先生から儒敎敎義の御講話を拜聽することは單に常識を養成すると云ふ方面よりでなく、吾々の修養上に多大の効果ありと信じまして諸君と共に淸聽して深く御言葉を味いたい次第であります。

松山敎授講演

私は只今閣下から御紹介を受けました松山で懷德堂の敎授を致して居る者であります。大變立派な御紹介の御辭を受けまして痛み入た次第であります。先般閣下から職員諸賢に何か話をせよと云ふ御命令がありましたので、本日參りました樣な譯で御座います。少將閣下は時々懷德堂に御越になり、常に御自分の官位を御忘になりまして自分より年輩の若い、そうして學問の到らない者の間に伍し御熱心に講義を御聽になることに就きましては、吾々平常から敬服して居る次第であります。斯樣な處から自然御心安くなりまして先般も御依賴のありましたときに御辭退するも反て失禮と存じまして御受けを致した樣な次第であります。何分不才で學問も到らぬ者であり

ますので本日話しますことも、只平常讀んで居ます書物の中から儒教教義の一斑を御話申上げるのであります。しかし私は元來講演はあまりやつたことが有りませぬので自然諸君に判り易く述べることは出來難いと存じます。この點は前以て御斷りをして置きます。又懷德堂の模樣は閣下から御話も御座いましたが、これは尙後から申上たいと思ひます。これから儒教の教義一斑と云ふ題で御話申上げます。

儒教とはどうゆうものであるかと云ふことは、第一に誰しも考へることであります儒教の發生的發展を學術的に研究しますと、通俗に考へて居ることとは違ふこともありましやうが、今御話申上げるのは今日一般に儒教と認めらるるものに就て申すのであります。儒教と云へば今日一般に孔子の教、又は其の教を受け傳へ之を發揮した曾子、子思、孟子を併せて孔、曾、思、孟、四子の教と大體解せられて居ります。外國人は儒教を英語では Confucianism と稱して居ります。之を譯すれば孔子教となるのであります。支那にては宋以來儒教の經典たる五經の外に四書を重視する樣になりました。それは古の聖人の道を知るには五經と云ふ經典に依らねばならぬが、五經を明かにするには先づ論語、孟子、大學、中庸の四書からして入らねばならぬと云ふのであつて支那では宋以來殆んど一般の定說の如くになりました。我國でも德川時代にさやうに考へ四書を以て儒教の經典と認むる樣になつたのであります。本日はその四書の中から主に論語に就て御話したいと思ひます。

御承知の通四書は論語、大學、中庸、孟子の四つの書物でありますが、論語は孔夫子と其の門人竝に其の當時の列國の君臣や其の他の人々との間に問答せられたものを書いたものであり、孟子も其の門人や當時の諸侯の君臣其の他の人々との問答を記されたもので、記述が系統的でなく一寸讀んでも組織的に了解することは困難であります。大學、中庸はこれに比較しますと稍や組織立ている、而しこれを西洋人の組織立た系統的に書いたものに較べると到底比較にはなりませぬ。從つて其の教義を組織的に了解することが困難であります、それで今論語を少しく組織立てて御話して見やうと思ひます。一體四書は前にも申した如く、宋代から論語、大學、中庸、孟子

と竝べて尊む樣になつたもので、其の中論語は早くより經書に入れられて居りましたが、孟子に至つては後世まで經書として取扱はれずして諸子の中に入れられてありました。又大學と中庸とは各禮記の中の一篇であつたが、やうやく宋の時代から程子などがこの二篇は儒教の義理の上に大關係あるものとして其の價値を認め禮記の中から引き出して單行するやうになつたのであります。但し中庸は梁の世已に單行した形迹はあります。孟子は唐の世、韓退之が之を尊んで其の異端邪說を闢いて孔子の教を明かにし、聖人の道を傳へた功績は禹の洪水を治めた功績にも劣らぬと譽め、又道は堯舜より禹湯文武周公孔子を經て孟子に傳はり、孟子歿して後、道が絕へたと云つて所謂道統の說をなしました、これから孟子は大に世に現はれたのであります、又大學、中庸はかの甕破りで名高い司馬溫公や程子などの研究表章によりて單行もし尊重もされ、遂に朱子に到つて大學、中庸、論語、孟子を合せて四書を五經の階梯として儒學を學ぶに眞先きに研究する樣になつたのであります。それ故四書の表章は程子などに始まり朱子に到つて定つたと云ふて宜いのであります。爾來元、明、淸を通じて、又我國に在りては德川時代を通じてこの考へが定說となりて學界を支配したのであります。從つて四書は非常に尊ばれたのであります。それで四書は孔子の教を說き、又其の教を發揮したものであつて、儒教の教義を知るには一番手近なもので且又必要なるものであることは大體誤のないことであります。

論語は先きにも申しました通り孔子の言を錄したものである。大學は程子に據れば曾子が孔子の言を述べたものと、曾子の意を其の門人が記したものとより成つたもので、古の大學人を敎ふるの法を載せたもの、中庸は孔子の孫に當る子思の手に成つたもので孔門傳授の心法を載せたものと云つて居ります。又孟子は孟子の言を載せたものであります。大體四書とは斯樣なものであります。今日はその中の論語について孔子の教の大體を說いて見たいと考へます。

儒教は西洋では Confucianism と云ふている。儒教は孔子が孔子以前の聖賢の教を集めて大成せられたもので、

孔子の手によりて形成せられたものであることは一般に認めるところで、其の點から云へば西洋人の譯する通り孔子教と謂つて宜しい譯であります。その孔子教を知ろうとするには是非共先づ第一に孔子の言を錄した論語に依らねばならぬ。論語の編者に關しては後人の種々なる異說もありますが、大體孔子の言を其の弟子達が記して居つたものを又弟子位に當るものが之を編輯したものらしい。他の古書に比べると後人の竄入と云ふ樣なことがなくて大體に於て眞を傳へて居るものとして信ぜられて居る故に孔子の教義を知るには今日論語に依る外はないと謂はれて居ります。又それが一番確かであります。そこで孔子の教はどう云ふものであるか。

論語を開いて見て第一に眼に付くものは學と云ふ字である。『學而時習レ之、不二亦說一乎』とある。孔子が學問好きであられたことは、あれ程謙遜な御方であつたが、それ丈けは自ら許されて居た。『十室之邑、必有二忠信如レ丘者一、不レ如二丘之好レ學也』と云はれて居る。自分程の學問好はあるまいとの言である。又、『默而識レ之、學而不レ厭、誨レ人不レ倦、何有二於我一哉』と云はれて言に發せずして心に之を識るし、學んで厭はず、人を誨へて倦むことを知らぬと云ふ三事の外に取り柄はないと云はれて居る。又『德之不レ修、學之不レ講、聞レ義不レ能レ徙、不善不レ能レ改、是吾憂也』と云はれて居る。斯樣に孔子の平素憂とせらるることの一には學問を講ぜないと云ふことがあります。又『吾嘗終日不レ食、終夜不レ寢以思、無益不レ如レ學也』と云はれ尙又『學而不レ思則罔、思而不レ學則殆』と云はれて居る、之皆學問の大切なることを說かれたものである。又六言の六蔽と云ふことを說かれて居る。之も亦學問の必要を說かれたものである。『好レ仁不レ好レ學其蔽也愚、好レ知不レ好レ學其蔽也蕩、好レ信不レ好レ學其蔽也賊、好レ直不レ好レ學其蔽也絞、好レ勇不レ好レ學其蔽也亂、好レ剛不レ好レ學其蔽也狂』と云ふことで仁、知、信、直、勇、剛、皆人間の美德であるが、學問をせぬと、かかる美德も蔽はるるところありて愚、蕩、賊、絞、亂、狂といへるが如き惡德に流るるものであると云ふのであります。此等の言によりて孔子が如何に學問の必要なることを痛感せられ且强く說かれたことが知れます。そして孔子は一生涯を通じて學を好み修養をせ

られたのであります。其の一生涯の學問修養の過程を說いて『吾十有五而志二于學一、三十而立、四十而不レ惑、五十而知二天命一、六十而耳順、七十而從二心所一欲不レ踰レ矩』と斯ふ云ふ風に言ふて居られる。卽ち孔子は十五歲にして學問に志し七十歲に至る迄孜々として學問修養を勉められて、終に心の欲するところが總て道に合ふといふ聖人の域に進まれたのである。此等のことから孔子の敎に於ては學問と云ふことが非常に大切であつて又孔子の敎の出發點であることが判ります。然らば孔門の敎の學問は如何なる敎科により何を目的理想として如何なる方法に依りてなされたものであるか、これから學問の目的、敎科、方法に就て說かうと思ひます。

孔子は『志二於道一、據二於德一、依二於仁一、游二於藝一』と云はれて居る。凡そ學問をする目的が無くてはならぬ。目的は其の志すところである。そこで孔子は其の目的を示して『志於道』と云はれたのであります。道とは人の履み行ふべき道であります。『據於德』とは德は得なりで人々善行を修めて己に得たるものが德であります、據とはそこを根城とすることで德を根城として其處に身を据ゆるのであります。『依於仁』とは仁とは人間道德の本源とも申すべきもので愛敬の誠に外ならぬのであります。故に仁を離るれば道德は成り立たぬ、それで仁に寄り添ふて仁を離れぬ樣にするのが依於仁であります。『游於藝』とは藝とは孔子の當時禮、樂、射、御、書、數を六藝と稱して居りました。この六藝は人間の道德程大切なものではありませぬが、文化の進んだる社會に於ては文化人として生存して行くには必要なるもので亦之に由りて精神を修養し得るものであります。故に藝を修めて其の中に心を游ばしめる、これが游於藝であります、又孔子は『朝聞レ道夕死可矣』と云はれて居ります。この言の如きは人が人としてこの世に生存し行くに如何に道が大切であるかを切言せられたものであります。是によりて孔子の學問の目的は道を知るにありと云ふことが判ります。而るに又『君子去レ仁惡乎成レ名、君子無二終レ食之間違一仁、造次必於レ是、顚沛必於レ是』と云はれて居りまして、君子の君子たるところは仁に在る、片時も仁に違ふべからずと云はれて居る。又孔子の道を傳へたと云はれて居る曾子の言に『士不レ可二以不一弘毅一、任重而

道遠、仁以爲二己任一、不二亦重一乎、死而後已、不二亦遠一乎』とある。卽ち其の意味は士たるものは仁德を成就すると云ふ重任を背負ひ死して後已むべきものなれば、弘毅でなくてはならぬ、然らざれば其の大任を果し得ぬと云ふにあり。此等の言に依ると仁と云ふものが何よりも大切なものとせられて居る。又論語を觀ると顏淵を始め仲弓、子張、樊遲、司馬牛などいふ門人達は孔子に仁を問ひ、孔子も亦仁を以て非常に大なる德として容易に許されぬところがあり、孔子の敎に於て最も大切なるものの如くに察せられる。ところが又論語には君子と云ふことが非常に多い。君子と小人とを竝べ擧げて對說してあるところなども多いのであります。その君子と云ふものが孔子の敎に在りて學者の標的となりてあることは明である。子夏に對しても『女爲二君子儒一、無レ爲二小人儒一』と云はれて、君子たることを弟子達に訓へられて居る。斯樣に孔門の學問の目的は或は道に在るが如く、或は仁にあるが如く、或は君子に在るが如く見ゆるが、此れ別物に非ずして畢竟一に歸著するものである。道は人の履み行ふべき大道である、人は行くには道路に由らざるべからざるが如く、人の人たるべき行爲をなすには當然由るべき規範がある。其の方面から道と名づけたものである。道を履行し善行を修めて吾物にしたのが德であつて、德は得と同じである。又仁は人間の道德の名であつて澤山ある道德の中で最も根本的のもので、而も諸他の道德を包括し得るものが仁である。君子とは道德を修め得た有德の人を謂ふのである。故に道は規範の方面より名づけたるもの、德は個人の修養的所得の上より名づけたるもの、仁は人間の道德の名、君子の有德の人を云へる名である。それで孔子の學問は道を行ひ德を修め仁を成し有德の君子となるを以て目的とするものである。であるから孔子の學は道の學問、德の學問、仁の學問、君子の學問とも云ひ得るのである。

さて道と云ふものは人間の當さに據るべき處の道であるが、其の道を如何に用ふべく孔子は敎へられたものであるか、このことは子路が君子を問ひしに對し孔子は『修レ己以レ敬』と答へられた、子路は只それ丈けのことでありますかと云つたのに對して『修レ己以安レ人』と答へられた、子路は尙滿足せず更に斯の如きのみでありますか

と尋ねたら、孔子は『修レ己以安三百姓一、修レ己以安三百姓一、堯舜其猶病』と答へられた。卽ち君子は己を修め進みて人を安んじ、更に進みて百姓を安んずるものであつて、この己を修めて以て百姓を安んずることは堯舜の如き聖人も、猶ほ難しとせらるるところであると云はれた。孔門の道はこの修己治人の道に外ならぬものであります。されば孔門の學その道に志す所以は己を修めて以て人を治むるに在るものであります。又或時子路、曾哲、冉有、公西華等弟子達が孔子に侍坐して居りました其の時孔子が云はれるには爾等各々志を云ふて見てはどうぢやと云はれた、子路は「千乘之國、攝三乎大國之間一加レ之以三師旅一、因レ之以三饑饉一、由也爲レ之、比レ及三三年一、可レ使三有レ勇且知レ方也』と申した。それは大國の間に介在して居る上に戰爭饑饉に苦められて居ると云ふ樣な一大國の要路に當つたなら三年後には人民をして向ふ所を知らしめんと云ふた。又冉有は『方六七十、如五六十、比レ及三三年一、可レ使レ足レ民、如三其禮樂一、以俟三君子一』卽ち方五六十里と云ふ小國で大臣と爲れば、三年で衣食を充實させること丈は遣つて見せませうと答へた。又公西華は禮に精しき人物であつた處から『宗廟之事、如會同、端章甫、願爲三小相一』と答へた。これは宗廟の祭や大名の會同したときなどに、禮服を著けて禮を佐ける下役になりましやうと申した。此等三人の志は何れも己を修めて其の得たるところを以て天下の事に施すにあります。今日に於て申せば何れも一の社會奉仕であります。此等弟子の志すところに依りて孔門の學の目的とするところが窺はれます。

次に孔門の敎科は如何であつたか、弟子達は何に由りて道を知つたかと云ひますに、孔夫子は四つのものを以て敎へられたといふことが見へて居る『子以レ四敎、文、行、忠、信』と論語にある。卽ち孔子の敎は文を以て智識を廣め、道を知り、行を以て實踐躬行を力め、忠信を以て誠を養ふのであります、これが孔門の敎科であります。又孔門の高足顏回が孔子の善く自分を敎へ導かるる模樣を述べて『夫子循循然善誘レ人、博レ我以レ文、約レ我以レ禮』と云ふて居ります。其の博我以文は四敎の文に當り、約我以禮は四敎の行に當るものであります。この

文が卽ち孔門の學の教科書である。文とは今日の所謂文章ではない。文とは何か、明かには云はれないが、古人は之を解して先王の遺文にして詩書六經なりと云つて居ります。卽ち今日に傳はれる書經、詩經等の經書であります。詩經に就ては孔子は『小子何莫レ學二夫詩一、詩可二以興一、可二以觀一、可二以群一、可二以怨一、邇之事レ父、遠之事レ君、多識二於鳥獸草木之名一』と申されて居ります。詩の德は廣大で詩經を見ると善心を興起し人間の道德的情操を養ふことが出來る。又之に依りて政治の得失を觀ることが出來る。又相集りて社會的生活をして協同和睦することが出來る。又假令怨んでも忿疾憎惡の甚しきに流るることがなく中和を得ることが出來る。又親に事へ君に事へることも出來る。又鳥獸草木の名を知つて博物上の智識をも得ることが出來ると云つて居られます。又其の子伯魚に謂つて『女爲二周南召南一矣乎、人而不レ爲二周南召南一、其猶二正牆面而立一也與』と云ひ又『不レ學レ詩無二以言一』と云はれたところから見ると、孔子が如何に詩を學問に必要なるものと見られて居つたかが判ります。書に就ては孔子が其の必要を說かれたことは論語には見へて居りませぬが、書は古の聖王賢臣の言を錄したるもので之によりて政治の得失、治國の要道を知ることが出來、其の他の經典も皆修己治人の道を載せたるものなれば教科として用ひられたのであります。これが孔門教科の文であります。その外行、忠、信の三がある。行は躬に行ふことで文を學んで道を知れば之を身に行はねばならぬ。忠信は心を盡し言葉に僞のないことで俱に誠である。凡ての行にはこの誠が根本とならねばならぬ。文はいはば智的の修養に屬するものである。孔門の教は單に智的の修養に止まらない、必ず行と忠信とを竝べ教へらる、卽ち實行と心の內面的修養とを重んぜらるる、この處に孔子の教の優れたるところがある。次に學問の方法はどう云ふ風か、先づ第一に學問をするには志を立てなければならぬことを教へられて居る。遠きに行くにも、高きに登るにも必ず目的地を定めて其處に到達せむことを求むる、況んや學問をするには必ず目的理想を立てて之に達することを求めなければならぬ。是に於てか立志の要がある。故に孔子は『食無レ求レ飽、居無レ求レ安』と申されて居る。又『士志二於道一、而恥二惡衣惡食一者、未レ足二

與議一也』と申されておる。學問の目的は修己治人の道に志し、仁德を成し君子となるに在れば、身の安樂や衣食の美を求むる樣なことでは其の目的を達成することは出來ぬ。此等の欲望を棄てて學問に精通せねばならぬ故に、學問をするには立志が第一である。さてその仁德を成し君子となるには如何にすべきかと云ふ細かなる方法に至りては、孔子は其の對手の異なるに從ひ其の性質や力量などを考へて、それぞれ適切なる教育を施されたものなれば一樣ではない。孔子の教の骨髓たる仁を說かるるにも弟子の異なるに隨つて皆異つておる。今顏淵の仁を問へるに對し答へられしところを觀るに『克レ己復レ禮爲レ仁、一日克レ己復レ禮、天下歸レ仁爲、爲レ仁由レ己』と申されておる。禮とは何であるか、官制の如き政治上の制度を指すことあり、又冠婚葬祭の如き風俗習慣に關するものを指すことあり、又起居進退等威儀に關するものを指すことがある。何れも人爲的のものではあるが、もと〳〵人情に原きて中正と考へらるるところに定まりておるものなれば、朱子も之を解して『天理之節文、人事之儀則』と云つておる。卽ち禮は人事の形式の上に天理の現はれたもので、人間の當然由るべき道と考へられたものである。そこで克己復禮とは私欲に打ち克ちて禮に復り之に由ることである。顏淵は更にその細目を尋ねたるに對して『非レ禮勿レ視、非レ禮勿レ聽、非レ禮勿レ言、非レ禮勿レ動』と答へられた。卽ち視聽言動一々禮に合ふやうにせよと云はれた。又或時孔子は其の弟子曹參に『吾道一以貫レ之』と申された。之に對し曾子は『唯』と答へた。他の門人達は孔子の御言葉の意義が判らぬ、それで孔子が坐を起たれた後、曾子に尋ねたら曾子は『夫子之道、忠恕而已矣』と答へた。又子貢が一言にして修身之を行ふべきものありやと問ひしに對し孔子は『其恕乎、己所レ不レ欲、勿レ施二於人一』と敎へられて居ります。又『夫仁者己欲レ立而立レ人、己欲レ達而達レ人、能近取レ譬可レ謂二仁之方一也已』と云はれて居ります。前者は消極的の恕であり、後者は積極的の恕であります。この恕こそ仁德を成就する要法であります。之を約めて言へば孔門の學の目的は道を知りて之を行ふにある。この道は修己治人の道であり、又人の當さに由るべき道である。道を修めて己に得て自分の物になりたるが德である。多く

の德の中で最も根本的にして又最も大なるものは仁である。仁は之を推擴めると人間の凡ての道德が其の中に包括さるるものである。又道を知り之を修め德を成就せるものが君子である。修養の極心の欲するところに從へども、矩を踰えずといふ樣なところに到れば聖人である故に、結局の目的理想とするところは聖人にあります。仁と云ふことは孔子以前にも經典に見へますが、治者が民を愛し之に惠を施すの道德で、卽ち治者の道德に限られてあつた。孔子に至りて之を治者だけの道德に限らず總ての人間の道德とせられた。そして總ての道德は仁に包括さるものとせられた。孔子に依て始めて仁が斯く重く說き出された。孔子は『述而不レ作、信而好レ古』と云はれたが、仁に斯くの如き新なる意義を附け加へられたるは孔子の創見である。孔子以前には諸々の德が列擧されたが孔子は此等諸道德の本源たるものに眼を著けられた、之が支那敎學史上孔子の大を成す所以であります。孔子の弟子の有若が『君子務レ本、本立而道生、孝悌也者、其爲レ仁之本與』と云つておる。卽ち孝悌が仁を行ふ本である。孟子も『堯舜道孝悌而已矣』と云つておる。家庭に於ける父兄に對する愛敬の誠が本となつて、これが總ての物に推し擴められたものが仁である。孔子はこの人間固有の道德心にして、しかも一切の道德の本源に著眼して其處に仁を認められた、其の最も手近いものが孝悌で、之を擴めると人を安んじ、百姓を安んずるに至るものである、凡そ一切の道德にこの愛敬の誠を缺いては道德たることは出來ぬものである。この大眞理を看破りて仁を說き出されたるところが孔子の偉大なるところである。論語に載せられたる孔子の言葉なり孔子の爲されたことから其の敎義を稍々組織立てて申しますと大要斯樣なものであります。尙ほ以上申上げたことを約めて申せば、孔子は詩書六藝を以て道を知るに必要なる敎科書とせられ、この文に依つて敎を施こされた。そして其の知り得たる道は忠信を本として之を實行踐履の上に力め修めて之を己に得て德となし、己を修めて進んで人を治むるに足る君子たることを敎へられたるものである。而して人間の道德の本源にしてしかも最大なるものは仁なりとし、仁を修むるの要道は恕にありとせられたのである。

今日に於ては孔子の當時の詩書六藝を以て道を知るといふ事は出來ぬ。法律の智識も必要であれば、政治の智識も必要であり、將又日進月歩の學術上の智識も必要である。然しながら忠信を本として道德の實行を力め仁德を成して君子たることを學問の目的とするところに儒教の尊きところがあります。

今日は智育の方面は學校に於ても頗る整備し、人々も亦智的修養には熱心であるが道德の方はどうも疎かにせらるるやうである。勿論人格主義の教育も唱へられ、人格の陶冶といふことも隨分喧しく叫ばるるが君子たることを目的とする樣な風が世を支配する樣には見えぬ。若しも孔子の教が尊信せられ學校に於ても社會に於ても、眞にそれが行はるるならば今日の樣な種々憂ふべき社會の現象は一掃さるることと思ふ。人々の思想が功利に驚せ危險に陷り浮薄に流るる弊を救ふには孔子の教。卽ち儒教が必要であると思ふのであります。

大變時間が永びきました。尙ほ大學、中庸、孟子には人性なり、又學問の方法等に就て說かれてある。それが皆儒學上重要なる事でありますが本日は論語に止めて置くことに致します。

本日は論語にあることを稍組織立てて御話したのでありますが、さてこの儒教は我國民の德性を養ひ來つたものであります。自分等年輩のものは誰でも儒教の經典たる四書、五經を修めました。私共は最早老年の域に入らんとしております。若い人達は四書五經の名さへ知れる人が少ない樣になつて參りました。それで此處に列席せらるる若い方々には、この話によりて多少なりとも儒教の如何なるものであるかを、御了解になつたならば私の幸であります。今日迄我國民が忠孝仁義を重んずることを知るは儒教の力に由ること大なるは言ふまでもありませぬ。儒教の忠信孝悌を道德の根本に置くことは忠孝一致の我國民道德を永く維持しまして世界に冠絕せる國體の美を天壤と共に無窮ならしむるに極めて必要なることと存じます。それには國民の德性を涵養するの要があります。

勿論教育勅語があつて國民の當さに履み行ふべき道德を明かに、御示しになつておりますが、之を遵奉する精神

を養ふには、之を涵養する經典がなければならぬ。私はその國民的經典として、儒教の經典たる四書が最も適當なるものであると存じます。

その昔この大阪に五井持軒と申す學者がありました。正德から享保頃にかけての人でありましたが、四書ほど結構な書物はないと云つて平常四書を順講して其の徒に授けました。それで當時世にこの學者を四書屋の加助と申しました。加助は持軒の俗名であります。

今日は大正の大御世でありますが、四書の道德的經典としての價値は昔と何等變りはないことと信じまして、私も持軒に倣ふて懷德堂に於て毎日曜四書を順講致しております。

日露戰後「ルウドルフ、スタインメツツ」と申す和蘭の學者が戰爭哲學（ゼ、フイロソフキー、オフ、ゼ、ウオル）と申す書を著しました。この書物は私は觀ませぬが、これは日露戰役に東洋の一小國日本が、世界の大國露西亞を打破つたのに感じ、日本人の忠義があんな奇蹟的な大勝を贏ち得たのであるが、若しこの戰爭がなければ、あんな大忠勇を顯はすことは出來ない、つまり戰爭は忠義に之が實行の機會を與ふるもので、若し戰爭がなければ文明の最大美果の一たる忠義を喪ふことになるであらうと、いふ樣なことを書いたものと見えます。然るに其の後米國の學者「ジョシア、ロイス」といふ人が、忠義の哲學（ゼ、フイロツフキー、オフ、ゼ、ロオヤルチー）といふ書を著しました。其の中に「スタインメツツ」の所論を駁しております。戰爭がなければ忠義は表はれぬと云ふが、それでは軍國主義で自國の富强を圖るに急なる君主があつて、他國を攻略せんと欲するとき、斯かる君主に忠義を盡すとすれば、之は天下を害する忠義と云はねばならぬ。故に只君主に忠義であつてはならぬ、忠義に忠義でなければならぬと論じております。しかし之は我日本などに對しては杞憂である。吾等臣民は王道仁義を理想とせらるる我君主に對し、忠義を盡すので、それは取りも直さず王道仁義に忠義であるのである。「ロイス」の忠義に忠義といふことは我國に於て實行されて居るのである。斯かる愛でたき國柄を成したのは、我國

歴代の天子が儒教の經典によりて帝王の學を遊ばされて、王道仁義を以て理想となされ、國民も亦儒教に依りて仁義忠孝を勵むからであらうと存じます。これは西洋人の一寸了解し難いところと考へます。終に臨みまして懷德堂のことを少しく御紹介致します。

懷德堂と申すは今から約二百年前大阪に出來た唯一の公學で、つまり幕府の官學に對しては、民間での私學ではありますが、幕府の允許を得た學校で平民の教育をしたのであります。當時の學者三宅石菴が最初の教授卽ち學主であつた。幕府の允計を得ましたのは享保十一年でありました。之より先き江戸に菅野兼山と云ふ學者が居て會輔堂と云ふ私學を興しました。時の將軍吉宗公が庶民の教化に有益なるを喜ばれ、黃金を賜ひて之を賞し、尙校地を恩貸せられた。後又或時京、大阪邊にも斯樣な學校を興すものあるまじきやと近侍のものに話された。大島近江守と申すもの其の父古心にこの噂を傳へた。そこで古心が其の友三輪執齋に話した。執齋は三宅石菴竝に其の門人中井甃菴と親しかりし故、甃菴に其の事を報じました。之が緒となりて甃菴は同門の富豪五人のものと奔走盡力致して竟に幕府の允許を得、換地などを頂戴して懷德堂を公學と致しました。甃菴の子に竹山、履軒と云ふ二大儒があらはれました。竹山は懷德堂の學主となり、學徒も四方より集り來り、江戸の官學昌平黌とも相拮抗するほどの勢あり、斯くて關西の文運に大なる貢獻を致しました。明治二年學制の改革と共に學徒も四散し、遂に廢校となりました。明治四十三年の頃大阪人文會に於て會員なりし故西村時彥君が竹山、履軒を養成したる懷德堂の先師儒五井蘭洲の傳記を講演されましたが、其の講演は大に會員を感動せしめ、宜しく大阪の文化に貢獻したる懷德堂先師儒のために公祭を行ふべしといふ議が一決し、懷德堂記念會を組織して盛大なる祭典を擧行し、同時に展覽會、記念出版などが行はれました。然るに當時寄附金が多く集りまして、此等の事を行つた後に六千圓程も金が剩つたので、之を基本として財團法人懷德堂記念會が設立されて、昔の懷德堂が爲した樣に、大阪の文化に貢獻する事業を興すことになり、府立博物場の一隅に府有地を借用し、今日の懷德堂を建てたのであ

ります。事業としましては主として、定日講義、文科講義、定期講演、通俗講演の講義講演が行はれて居ります。定期講演は大正五年から定日講義は大正六年から始められました。定日講義は月、水、木、日の四曜日にて、これは聖經賢傳によりて德性を涵養することを主眼として、主として支那の經書を講じております。其の中萬葉集の一科があります。これは懷德堂の先師儒に萬葉集を研究せられたる學者がありました。その家風を傳ふるの意であります。午後七時より九時までの授業で、これは一定の職業ある人のために行ふの主旨で其の便を圖つたのであります。但し日曜は四書の講義を朝九時から十時まで講じて居ります。別に文化講義といふのがあります。これは文學、哲學を深く攻究せんとする人々の爲に、東西兩洋の文學哲學の名著を講ずるもので、第一、第三、第五金曜日には哲學を、第二、第四金曜日には文學を講じて居ります。又土曜日には京都帝國大學文學部の諸教授が各其の專門の研究につきて、或題目を定め數回に亘つて連續的講演をせられます。これによりて文科に屬する諸學科に亘りて最高等なる學術的智識を得られる譯であります。又別に通俗講演といふが毎月一回あります。これは市民の常識を養ひ、品性を向上するを目的としておりますが、京大の政、法、經濟、理、工、醫諸學部の先生達に一年を通じ、或は科學、或は政治、或は法律、或は經濟の講演を願つて居ります。本年は經濟に關する講演をやつて居ります。

今申上げました講義、講演の外、時々有益なる書の出版をやつて居ります。大體事業は斯樣なものでありまして、教化に裨補し、文化に貢獻したいと存じて居ります。諸賢に於かせられても、或は既に御承知のこととも存じますが、御閑があれば本堂を利用せられんことを希望致します。

無味乾燥なる講演を永々と續けまして御聞苦しいことであつたと存じます、御靜聽下さつたことを感謝致します。

《了》

四　逆瀨氏御祕藏の資料

今年の七月から八月へかけて、私はゆくりなく懷德堂關係の資料數點と、適塾に關するもの二點とを、偶見する榮に浴した。それ等は大阪市阿倍野區松虫二―八―二に在住される逆瀨久米次郎氏および令嗣允吉氏の祕藏にかかるもので、わが堂友會委員中島安之助氏の斡旋による賜である。適塾關係の二點はここでは觸れないが、懷德堂關係のものとしては、先儒の墨跡二十六葉と數片に斷裂した「新造學校觀光院圖」一枚とである。二十六葉の墨跡は、いづれも屏風に貼られていたのを剝離して保存され、蕉園先生の詩と長短句で二十一葉、竹山先生の墨跡一葉、伊藤仁齋先生の詩一葉、五井蘭洲先生の詩一葉、渭水思恭の詩一葉、崑山逸人の東坡作「日喩」一葉である。「新造學校觀光院圖」と題されている學校設計圖は「天明二年壬寅孟秋　大阪中井積善私擬拜呈　門人古林尙案謹謄」とある。斷裂を注意深くつなぎ合すと、方六十間の地所に配置された學校の設計圖を、ほぼ完全に復元することができた。いったい懷德堂は、享保九年（一七二四）に創立され、享保十一年（一七二六）に甃菴先生によって增築されたのが、寛政四年（一七九二）の大火で烏有に歸し、寛政八年（一七九六）に竹山先生によって再建されて、それが明治の閉鎖時の學校については、昭和六年八月、中井木菟麿氏が幼時の記憶を辿って描かれた圖があって、表口十一間半、奥行二十間とある。ところでこの「新造學校觀光院圖」は「天明二年」（一七八二）に「中井積善私擬拜呈」とあり、六十間四方という大きな規模をもっている。思うにこれは實在した懷德堂ではなく、却って『草茅危言』卷二の「學校の事」に見える「建學私議」の記述と一致する。まことに興味深い貴重な資料である。この事については、今回共にこの資料を檢討した畏友梅溪昇教授によって、他日何等かの形で發表されることになるであろう。先儒の墨跡については、私が他日機を得て紹介したいと考えている。なお逆瀨氏は、これ等の資料の外に、多くの珍らしい遺品を祕藏されている收藏家であるが、研究者に對しては、惜しげもなく祕筐を開いて見せて下さり、

紹介や發表の自由さえ許された。御寛容に對して、厚く御禮を申し上げたい。

以上は、懷德堂先賢師儒を記念する資料について、その蒐集・整理・保存事業の角度から、近二年來の進展の情況を略記して報告したのであるが、それにつけても、新田和子夫人・吉田晋氏・中川幸三氏・逆瀬久米次郎氏および允吉氏等の御誠意をはじめ、この擧に贊同して力を盡して下さった方々の御好意に對して、末筆ながら感謝と敬意とを表したい。